

『金瓶梅』から見る女性たちの生活

——「潘金蓮」と「李瓶児」を中心に——

山崎 桃子

はじめに

本論は、『金瓶梅』の作品の舞台、西門家を中心に研究を行う。具体的には、西門家での女性たちの生活から、西門家の間取りが作品に与える影響を調査、考察していく。

『金瓶梅』の物語の殆どは、西門家が中心となっている。このことから、『金瓶梅』という作品を理解するには、西門家を読み解く事が必要不可欠だと考えた。

『金瓶梅』の成立時期には諸説あり、嘉靖年間（一五二二―一五六六）とも万暦年間（一五七三―一六二〇）ともされる。『金瓶梅』の存在が、文献上初めて確認されるのは万暦二十年（一五九二年）頃のこと。最初の刊本である『新刻金瓶梅詞話』（詞話本一六一七）

が出るまでの数十年は、文人の間を写本で流通するに留まり、入手困難な書であったようである。

本論で作品を引用するにあたって、第一回から第六十六回は田中智行『新訳 金瓶梅上』（鳥影社、二〇一八）・『新訳 金瓶梅中』（鳥影社、二〇二二）、第六十七回から第百回は小野忍・千田九一訳『金瓶梅』（岩波書店、一九七三―一九七四）を使用した。前者は『金瓶梅詞話』万暦本を、後者は『金瓶梅詞話』（詳細は不明）をそれぞれ底本とするもので、本論では田中『金瓶梅』、小野『金瓶梅』と省略して示す。

第一章 『金瓶梅』基礎的紹介

一 『金瓶梅』 あらすじ

あるところに、潘金蓮という美しい女性がいた。彼女は武大という、真面目な餅売りを夫に持っていたが、甲斐性もなく容姿も悪い武大を疎ましく感じており、いつも軒下で纏足を見せつけては、男たちを誘惑していた。

そんなある日、潘金蓮は西門慶という美男子と出会う。西門慶は清河県一の薬屋を営む権力者で、彼もまた一目で潘金蓮を気に入った。やり手婆の王婆の手引きもあり、すぐに男女の関係となった二人の仲は近所中の人々が知ることになった。知らないのは夫の武大のみ。そんな二人は邪魔になった武大を毒殺する。

西門慶は役人を買収し、毒により、ただならぬ様子の武大の遺体を焼いてしまう。武大の弟である武松が殺されたということ、兄嫁潘金蓮は西門慶のもとへ嫁いだことを知る。

武松は兄の仇を討とうとするが、勘違いで別人を殺してしまふ。捕らえられた武松は背中を杖で四十叩かれた後、墨流刑となり、復讐することが出来なくなってしまう。西門慶と潘金蓮は無事逃げおおせてしまったの

である。

こうして『金瓶梅』では西門家を物語の舞台とし、西門家の繁栄と没落を描写していく。

二 『金瓶梅』登場人物解説

最終回において、登場人物たちを総括する詞が登場する。続いて、本論で主に論じる人物を紹介する。

ひとり書読み嘆きにくれる

めぐる因果を誰が知る

豪者西門世嗣に困り

狂者経済刃にかかる

樓の月影（玉楼・月娘）あくまで冴えて

瓶の紅梅（李瓶児・春梅）夜風にしほむ

あわれ金蓮咎めを受けて

浮き名千年語り草

小野『金瓶梅（十）』第百回 三〇〇頁

潘金蓮

『金瓶梅』の金。幼い頃父親をなくし母親に売られる。幼い頃から針を習い、三年女学に通った。そのため字を

読んだり、詩、歌、文章、小唄に至るまでも知っている。小さな纏足に美しい顔を持つ。嫉妬深く冷淡な性格で、数々の人間を陥れ苦しめる。嫁がされた夫武大を毒殺後は、西門家の第五夫人となる。

淫欲に溺れ、『金瓶梅』作中、様々な男性と関係を持つが、彼女と関係を持った男性は悲惨な末路を迎えることが多い。屋敷の旦那は潘金蓮と関係を持った後、体を壊す。それでも潘金蓮と関係を持ち続けた結果、腎虚によって死んでしまった。夫武大は毒を盛られた上、潘金蓮に馬乗りの姿勢で窒息させられ、死んでしまう。小者琴童は西門慶に潘金蓮との関係が露見、酷く鞭で打たれた上に、髪をむしられ屋敷を追い出される。西門慶は潘金蓮の淫心から、媚薬を過剰摂取させられる。さらに、西門慶が憔悴しきっているにも関わらず、潘金蓮はその淫心を抑えきれず、毎夜西門慶の上に乗り、自ら欲望を満たし続けていた。

このように、数多くの男性を破滅させてきた潘金蓮であったが、最後は正妻呉月娘に陳經濟との関係が露見してしまう。結果、潘金蓮は西門家を追い出され王婆に売りに出される。そして流刑から帰ってきた武大の弟武松に殺され王婆共々死亡する「第八十七回」。

李瓶児

『金瓶梅』の「瓶」。色白で上品な女性で、大名府梁中書の妾であったが宦官である花太監に迎えられ、花子虚の正妻となる。花子虚は西門慶の悪友でもあり、李瓶児はそんな夫の廓通いを相談する名目で、西門慶を誘惑する。兄弟間での財産争いに巻き込まれ、怪我に苦しむ花子虚を見殺しに西門家へと嫁ごうとする。

花子虚の死後、李瓶児は傾きかけた西門家を見捨てて医者者の蔣竹山と結婚するなど打算的な姿を見せる。だが性的に満足せず、あつさり蔣竹山を捨てて。その後西門家へと嫁ぎ、第六夫人となる。

西門家に嫁ぐと途端に他の夫人を立て、侍女や小者にも優しい女性へと変貌する。花家から持ち出した財産で裕福な李瓶児は、それを笠に威張る事もなく、夫人たち持ち寄りの宴に気前よく金を出す。また、跡継ぎとなる官哥を出産した後も、正妻呉月娘や他の夫人を立てる。そんな李瓶児に対する人物評は、いつも彼女に肯定的なものとなっている。

別人のように変貌した李瓶児であったが、息子官哥を潘金蓮の思惑によって亡くした悲しみによって病死してしまう「第六十二回」。

龐春梅

『金瓶梅』の「梅」。元は正妻呉月娘の侍女だった。しかし、潘金蓮が嫁いでくるにあたって、潘金蓮へと譲られる。中々の器量良しで、西門慶のお手付きとなる。潘金蓮も龐春梅を良く可愛がり、着物や髪飾りを与え、纏足を施していた。潘金蓮とは姉妹のような仲で、気骨ある勝ち気な女性である。西門慶に愛されている潘金蓮の権力、自身がお手付きであるという自信から、他の侍女や小者に強気な態度を見せトラブルも多い。

第二章 『金瓶梅』の女性たち

一 夫から愛されるために尽くす妻たち

『金瓶梅』では、西門慶が誰の部屋で休むかという事が、非常に重要視されている。夫が部屋に訪れる、という事は夫からの愛情や、子どもが出来る可能性も踏まえ、妻にとつては自身の立場に関わるからである。例えば、第四夫人孫雪娥は、四娘（よんおくさま）と呼ばれる事もなく、行事で夫人たちが出掛けるときも留守番し「第十五回、第三十五回、第四十一回」。西門慶から与えられる服も、他の夫人に比べて数が見劣りする。

まず作ったのは月娘のもの——緋色に五色をちりばめた金欄緞子の柄物地に獸らが麒麟をあがめる補子をつけた長袖長衣の袷が一枚。黒鳶に五色をちりばめて金糸織りの縁をつけ花をわたる鸞鳳の図柄を瓢箪型にあしらった薄絹長衣が一枚、緋色の金欄緞子に麒麟の補子がついた長袖の袷と御納戸色のゆつたりしていて裾が地を曳く金欄の裾との一揃え、そして沈香色の柄物で補子がついた金欄の薄絹の袷と緋色地に金の枝と緑の葉をあしらひ百花をあらわした裾が地を曳く裾との一揃え。そのほか李嬌兒、孟玉楼、潘金蓮、李瓶兒の四人にはそれぞれ、緋色に五色をちりばめた柄物緞子に錦鶏の補子をつけた長袖長衣を一枚と、羅紋うかぶ柄物緞子の上下を二揃え作った。孫雪娥には上下二揃えだけで、長衣は作ってやらなかった。

田中『金瓶梅中』第四十回 一七四頁

この場面からは、正妻の特権的立場と、妻たちの間でも細かい階級が存在する事が伺える。孫雪娥はこのように、家の中でも扱いが悪い。それは彼女が侍女上がりだからではない。夫から愛されていないからである。作

中、西門慶は一年あまり孫雪娥の部屋に訪れていなかった。「第五十八回」事が判明する。結果として、孫雪娥は他の妻たちや小者からすらも、侮られてしまっている。

妻たちの立場は、全て夫が握っている。夫が部屋に訪れなければ、自分の地位が低くなる。妻たちにとって最も重要なのは、夫からの愛である。そのため、夫が部屋で休むという事は大切な事であった。何故なら妻にとって夫から愛されるというのは、家庭内で出世するという事を意味するからである。

自らの生活を守るため、妻たちはいつも夫が誰の部屋で休んだかに気を配っている。特に潘金蓮は、西門慶が誰の部屋で休んでいるか執拗に確認している。それは、潘金蓮が嫉妬深いからであるのはもちろん、妾は正妻に比べ、非常に不安定な立場にいるためだ。正妻は格段に安定した地位にいる。服も正妻だけ豪華に仕立てたり、小者や家を管理する役割を担う。子どもを産めなくても、家から追い出される事はない。また、妾が男児を産めば、正妻は大媽となる（筆者注…大媽とは…庶子からみて父の正妻をいう。嫡母。官哥からみた呉月娘）。その妾の子が家を継ぎ、家を助け、正妻たちを養う事になるのだ。一方、妾は夫から愛されなければ、最悪人に売

られたり妓女となってしまう。作中、西門慶に関して、このような描写がある。

妓女あそびに心血をそそいだり、良家の女をくどきおとしたりしたあげく、家にむかえてみて少しでも気に入らないと、すぐ口売りに売らせてしまう。ひと月に口入れの家をおとずれること、なんと二十度あまり。

田中『新訳 金瓶梅上』第二回 五六頁

たとえ良家の女であろうと、妓女であろうと、一度家に入ればその後は夫に運命を委ねる事になる。もちろん、西門慶が冷酷な性格だからこそその仕打ちであるが、夫であれば、本来的にこのような行為もなし得たのだ。

潘金蓮は作中、様々な方法で西門慶の愛を得ようとする。房で度々西門慶に讒言を行い、孫雪娥を打たせたり「第十一回」、正妻呉月娘との仲を引き裂いたり「第十八回」、他の夫人たちを蹴落とす事に余念がない。その度に西門慶は潘金蓮の言うがままとなったため、潘金蓮は元氣一杯となり媚を振り撒いていた。それもこれも、西

門慶が潘金蓮の部屋で休み彼女に歓心を持つているからこそ、出来た事である。

しかし、潘金蓮の行動に、一つ奇妙に見える事がある。潘金蓮は度々西門慶が侍女や家外の女性に手を出すのを、手引きする事があるのだ。例えば、自身に仕える侍女春梅、後に第六夫人となった李瓶児、後に来旺の妻宋惠蓮が該当する。しかし手引きした後、潘金蓮の態度は一変する。宋惠蓮と孫雪娥を対立させ、宋惠蓮を首吊り自殺に追いやる。また、李瓶児に嫌がらせを行い、心労による病気を患わせる。唯一自身に仕える龐春梅だけは、いじめる事なくよく可愛がっている。

なぜ、最後にいじめて殺すのに、潘金蓮は手引きするのだろうか。最初から手引きせずに西門慶を引き留める、正妻呉月娘に告げるなどして防がないのだろうか。それには、ある価値観が関係している。

昔から、痴れ男は妻を恐れ、賢い女は夫を恐れるという。三従四徳こそは婦道のよりどころだ

田中『新訳 金瓶梅上』第二十回 四二〇頁

三従とは、婦人は嫁ぐ前は父に、嫁いでは夫に、夫の

死後は子に従う事とされる。四徳とは婦人の励むべき婦徳、婦言、婦容、婦功の四つの徳目である。女性としての節操を守る婦徳、女性らしい言葉遣いの婦言、女性らしい身だしなみの婦容、家事の婦功を言う。さらに、良き妻とは夫の愛を一人占めせず、妾を取ることも反対しては行けないとされていた。つまり、潘金蓮は良き妻として、夫に従い、西門慶のために手引きしていたのである。そうする事で、西門慶の歓心を買おうとしたのである。

金蓮も、西門慶にどこかで出くわして周りに人がいないと、二人を引きあわせてやり亭主の歓心を買おうとするのだった。

田中『新訳 金瓶梅上』第二十二回 四六四頁

ただし、手引きをして西門慶の歓心を買うだけではなく、潘金蓮はさらなる工夫を凝らしている。潘金蓮は李瓶児との手引きをする際、西門慶とある約束をする。

「まず一つめ、廓通いは許しません。二つめ、私の言葉に従うこと。三つめ、あの人と寝にいつてか

えつたら、様子を伝えること。ひとことでもごまかしたら承知しません

田中『新訳 金瓶梅上』第十三回 二七四頁

潘金蓮は、一つめと二つめの約束で西門慶を一層自分の意のままにさせようとするだけではなく、三つめの約束によつて、西門慶が自身の部屋に訪れるように仕向けているのである。潘金蓮は非常に巧みに、西門慶の歓心を買ひ、自身の立場を優位に進めようとしたのである。官哥の乳母である如意との手引きでも同様の事が起きる。

「へんなやつ、とやかくいうわけじゃないわ。あなたがあのすべたを手放せないってことは、あたし百も承知だから、これからはあたしにひと言ことわってちょうだい。そしたら、あそこへゆくのを許してあげる。それから、あいつがあなたになにかせびったときも、あたしに話すの。こっそりあいつに物をやったりしたら、承知しないわよ。もしもあたしそういうことをきかないで、そんなことを耳にしたときには、あたし騒ぎたててやるから。あたしにたてつ

いて来たら、あんなすべたをたたき出すぐらい、なんでもないのよ。李瓶児が来たときみたいに、またあなたにだまされて、あやうくあたしの顔がつぶれるところだった。

小野『金瓶梅（八）』第七十二回 八五頁

この場面は、如意と私通をしようとする西門慶に対して、潘金蓮が釘を指す場面である。潘金蓮は、西門慶に過去李瓶児の手引きを行った際に念入りに約束している。

潘金蓮がこのように用心したのは、以前自分が手引した事で起こった宋恵蓮を第七夫人にするという話「第二十六回」や、李瓶児が自分より先に男児を出産した事「第三十回」が、よほど潘金蓮にとつて屈辱的だった所為だろう。そのために、潘金蓮の行動は、良き妻として夫のために手引きをする女性から、邪魔物を排除し、自身の立場を守る行動へと変化したのである。

しかし、潘金蓮は、自身に仕える侍女龐春梅は、最後まで可愛がっている。この違いは何故だろうか。次節では、侍女や小者が、西門慶のお手付きとなった事で起きる変化を上げると共に、不安定な立場にいる侍女や小者

について考察を行う。

二 出世するため、身を捧げる侍女と小者

潘金蓮の侍女、龐春梅は西門慶のお手付きとなると、龐春梅は潘金蓮から丁寧に扱われたり、西門慶に服を仕立てて貰えるようになる。

西門慶は春梅を部屋に呼び、春がきて杏や桃が赤く蕾を綻ばせ、風の戯れに楊柳が緑の腰を浮かすかのようにして、この娘をお手つきとした。女はそれから春梅を精一杯引き立てて、炊事やかまど掃除はさせずに、部屋で寢床の支度をさせたり茶を運ばせたりするだけに使った。服や髪飾りはお気に入りを入れて、両の足は布で小さくしばらせた。

田中『新訳 金瓶梅上』第十回 二〇八頁

龐春梅が西門慶のお手付きとなった結果、潘金蓮は龐春梅に軽い仕事だけを任せるようになり、更に纏足まで施すなど、相当な可愛がりようを見せる。潘金蓮のこの行為には、もちろん、お手付きを可愛がるという西門慶へのパフォーマンズも含まれるだろう。龐春梅がお手付

きとなった事によって、潘金蓮も力を得る事に繋がるのである。潘金蓮が琴童との不義密通が疑われ、西門慶に鞭を打たれている際、次のやりとりが描かれる。

春梅を呼んで懷に抱え、たずねるには、

「じっさいのところ淫婦は、小者となにかあったのかな。お前が淫婦を許せというなら、許してやろうじゃないか」

春梅は拗ねて甘えて、西門慶の懷に腰をかけたまま言うよう、

「それはね、父様、あなたもまったくねえ。奥様とは一日じゅう唇と頬っぺみたいに寄り添ってしまいたけど、奥様がどうしてもあの奴隷の相手なんてしなすか。これはぜんぶ、私ら主従に憤懣やるかたない人が、こういう事をこしらえたんですわ。父様。あなたもちゃんと取りしきってくださいしないと、かつこわるい評判がついて回ることになりますよ。こんなことが外に漏れたら、人聞きがいいものかしら」

田中『新訳 金瓶梅上』第十二回 二四一頁

この後、潘金蓮は許され、西門慶と酒を飲んだ。龐春

梅がお手付きとなり、力を持ったお陰で、潘金蓮は許されたのである。お手付きとなった龐春梅が西門慶の膝に甘え、取りなしたからこそであろう。

もし、龐春梅が身の程を弁えず、潘金蓮の座を脅かすような素振りを見せれば、いずれ潘金蓮から排除されたであろう。しかし、龐春梅は潘金蓮に侍女として良く仕え、お手付きとしての力を潘金蓮のために發揮したため、龐春梅は排除されずに可愛がられたのである。

小者来旺の妻、宋惠蓮は西門慶のお手付きとなると、龐春梅以上の出世をする。

惠蓮は西門慶と私通してから後、服にハンカチに髪飾りに香茶といった品をこっそり渡されたのはもちろん、銀子だけでも両もて量れるだけを手元におき、門口で髪飾りや紅白粉を買ったので、装いが以前と異なるのがだんだん目につくようになってきた。西門慶の方でも月娘に、あいつはスープを作るのがうまいからといって、家全体の賄いをする主厨房から外させた。玉簫とふたりして月娘の部屋に仕えさせ、その裏手の小厨房でもつばら茶を沸かし料理をととのえ、月娘の部屋へ食事を出したり、月娘

のために裁縫したりするのを役目としたが、こまごま述べるまでもあるまい。

田中『新訳 金瓶梅上』 第二十二回 四六四頁

やはり、目に見えて宋惠蓮の待遇が良くなっている。奥の主厨房ではなく、呉月娘に仕えるようになったのも、西門慶が私通をしやすくなるためであろう。やがて、宋惠蓮が西門慶のお手付きであることが周知の事実となると、宋惠蓮は身の程を弁えず、夫人たちの遊びに口を出したり「第二十三回」、仕事もせず夫人たちと遊ぶようになった「第二十五回」。龐春梅はお手付きとなった後も仕事を続けているのに対し、宋惠蓮は第四夫人孫雪娥を差し置いて夫人たちと遊んでいる。それほど、宋惠蓮は出世したのである。

小者書童は、西門慶の側で仕事をしているうちに、お手付きとなる「第三十四回」。

「息子や、よそで誰かにいじめられてはいないかい」
小者はこの機をのがさずに言った。

「ひとつお話がごさいます。父様のおたずねでなければ、わたくしからは申し上げぬところですが」

西門慶、

「かまわないから言いなさい」

書童は平安の一件をひととおり話して聞かせた。

田中『新訳 金瓶梅中』 第三十五回 三七頁

同僚の平安は、自身は宴会にあやかれなかったことを恨み、書童の陰口を言っていた。そして、書童は自身の悪口を話す平安をしかと覚え、房で西門慶に伝えたのである。平安はこの後、仕事に難癖を付けられ、指締めされた上に、棍棒で二十叩かれた。潘金蓮も、度々房で書童同様、西門慶に他の夫人たちの告げ口を行う「第十一回、第十八回、第二十三回」。房で甘え、自身の立場を優位に進めようとする同様の構図が見られるのである。房で愛される者は、旦那から優遇され、旦那の力をまるで自分の力のように使えるという事だ。

お手付きになる事は、主人が死んだ後も小者侍女たちに影響を及ぼす。李瓶児が侍女や乳母に形見分けをする際に、

迎春、年上のお前は父様のお手がついていて、出るわけにいかないから、私から大奥さまに申しあげ

て、お部屋で使っていたきましよう。

田中『新訳 金瓶梅中』 第六十二回 七二七頁

と話されている。李瓶児が死んでしまえば、仕える相手もないため、本来であれば迎春も西門家から出て行かなければならない。しかし、迎春は西門慶のお手付きのため、出ていかなくて済むのだ。

一方、年下の繡春は、西門慶のお手付きになっていないので出ていくようになると言われてしまい、嫌だと泣いている。乳母の如意も、何とか家においてほしいと李瓶児に取りなすようにすがっている。

なぜなら、侍女たちの売られる先が今より良い場所とは限らないためだ。口売り屋が悪ければ、酷い家や女郎屋に売られる事になる。たとえ、口売り屋が気を回して一人者を見つけ、妻として嫁がせようとしてくれても、その相手が口売り屋を騙し、自身の家の小者に嫁がせると言いながら購入し、女郎屋に転売する事もある。第四夫人孫雪娥は、実際にそうなってしまった「九十四回」。

このやりとりから、仕える相手である李瓶児を亡くした侍女たちは、非常に不安定な立場にいるという事が分かる。しかし、その不安定な立場を安定させる方法があ

る。西門慶のお手付きになるのだ。

官哥の乳母である如意は、李瓶児の位牌を守るため李瓶児の部屋にいた。西門慶もまた、李瓶児のため部屋に訪れ供養をしていた。その際、如意は西門慶のお手付きとなったのである。その結果、如意は無事西門家での自身の立場を安定させる事に成功する。

西門慶は寝台のある部屋の戸を開け、李瓶児の簪四本を探し出し、褒美に与えた。女房は叩頭して礼を述べた。迎春も、西門慶が如意を我がものにしたと知って、ふたりは手を握るようになった。女房は寵愛を頼りにし、足場が固まったとて、このうえ人の助けを求めることはなくなった。

田中『新訳 金瓶梅中』第六十五回 八〇七頁

迎春と如意は、お手付き同士手を組み、女主人を失うという危うい立場を安定させた。如意は李瓶児の部屋へと訪れる西門慶を甲斐甲斐しく世話している。主人だからというのはもちろんだろう。しかし、そこにはお手付きとなって屋敷に留まりたいという打算が存在しているのである。

以上の事から、お手付きとなった侍女や小者たちは、その家で力を得ることが出来ると分かった。その力を利用し、主人のために使う事もあれば、生きるために使う事もあった。次章では、そんなお手付きたちと、嫉妬深い潘金蓮との関係を考察していく。

三 『金瓶梅』のお時めきとは

『金瓶梅』ではしばしば「お時めき」、「時の運」という言葉が登場する。その言葉はお手付きとなった侍女や小物たちの事や、男児を出産した李瓶児を指している。

「この淫婦め。お望みどおりになったろう。あんたは生まれつきのお時めきで、父様母様のお部屋づき、私らは飯炊きの女房だつてのかい。わざわざ小者をよこして、ご指名で飯炊き女に茶をたのませやがって、飯炊き女はあんたが使えるのかね。あんたと私は、米を炊いたら飯になる——あんたも私を知っている（おたがいしつたものどうし）、コオロギはガマの肉をくらわず——どちらもひと鍬の土の中（おなじあなのむじな）、ってやつさ。どのみちあんたが父様の慰み者でなけりやそれで終いなん

だ。慰み者だったところで、あんたなんてこわかないよ」

田中『新訳 金瓶梅上』第二十四回 五〇七頁

「見たかったら行けば。私は見ませんけどね。あの人は子どものいる姉様で、お時めきなんだから、

田中『新訳 金瓶梅上』第三十回六三六頁

「この点数かせぎの牢屋暮らしめ、どうしてくれよう。こんどお前が最賃をして、お時めきだけ相手にしようとするときや、せいぜい足をよろめかさぬようにするんだね。」

田中『新訳 金瓶梅中』第三十五回 六六頁

「時の運に見放された私らみたいな女は、手当たり次第に植えた桑の木ってなもんで、列をなさない（お仲間に入れない）のさ。」

田中『新訳 金瓶梅上』第二十三回 四七八頁

この場面での時の運に見放された女Ⅱ孫雪娥

私ら時の運に見放された女のこととは、なにかにつけ鬪鶏みたいな目で見てるくせに。あのろくな死に方をしない心変わりの強盗め、すっかり心をたぶらかされて変わり果て、いまみたいになっちまったの

田中『新訳 金瓶梅中』第三十五回 四七頁

この場面での時の運に見放された女Ⅱ潘金蓮

これらの場面から、屋敷の旦那、夫から愛される事はお時めきであり、愛されていない事は時の運から見放されたという事が読み取れる。特に、子供を出産した上、それが待望の男児であった李瓶児はまさにお時めきであろう。

しかし、夫人である李瓶児だけでなく、小者来旺の妻である宋恵蓮までもがお時めきと呼ばれた。この事から、宋恵蓮はお手付きとなることによって、他の小者や侍女より頭一つ二つ抜けた出世をした事が伺える。他の西門慶のお手付きとなった侍女龐春梅や迎春、書童、如意はお時めきと呼ばれていないためである。さらに、西門慶は龐春梅や如意には、子供が出来たら妻にしてやると話す一方、宋恵蓮は子供が出来る前から、妻にしよ

うと話していた。そんな宋恵蓮を潘金蓮は、李瓶児と同様深く恨んでいたようである。その事が、宋恵蓮が自殺し、一年ほど時間が経過した後には判明する。

潘金蓮はお手付きとなった如意を強かに罵る。その内容は以下である。

「この白首の、まおとこ淫婦め、まだなにやら大きな口をきいてるのね。夜中に旦那さまにお茶を出したり、ふとんを敷いてあげたりしたのは、誰なんだい。外套をもらって着たのは、誰なんだい。かげでそんなうまいことをしていながら、あたしが知らないとも思っているのかい。こつそりおなかを大きくしたって、あたし、ちつともこわくないよ」

「ほんとうに子供ができたら、やつぱり死んでしまいますよ。わたくしたちはとてもそんなふうにはなれませんか」

金蓮も、そのことばを聞かなければよかったのですが、聞いて心頭に火を発し、白い顔をまっ赤にして、つと進み出ると、かみさんの頭の髪をむんずと引き据え、片手ではおなかをしきりにぐりぐり小突きまわします。韓のかみさんに中を割ってはいられまし

たが、金蓮はさらに毒づいて、

「恥知らずのすべため、男たらしの淫婦め、あたしたちのところでは滅多に用をいいつけないもんだから、とうとうまおとこしやがった。いったい、お前はこの部屋のなになんだい。お前が来旺の女房の生まれ変わりだつて、あたしやちつともわくないよ」

小野『金瓶梅（八）』第七十二回 五二頁

潘金蓮は、如意に対し、宋恵蓮と同じだと罵っている。潘金蓮は何と一年ほど時間が経過した後でも、自身の立場を脅かした宋恵蓮をしかと覚え恨んでいたのである。潘金蓮の嫉妬深さ、執拗さは宋恵蓮から如意へと地続きになっているのである。

如意は李瓶児の死後、李瓶児の部屋で西門慶のお手付きとなった。潘金蓮からして見れば、李瓶児のように白い肌を持つ女性が、宋恵蓮と同様お手付きになる事で力を得た。非常に脅威的な存在であろう。

作中潘金蓮は、目敏く西門慶のお時めき、お手付きを見抜き、頭を押さえつけんとする。例えば、小者来旺の妻宋恵蓮に対しては策略に陥れて自殺させ、李瓶児に対

してはいじめぬいて病によつて死なせ、小者書童に對しては服を貸さずに冷遇し、官哥の乳母如意に對しては髪や腹を押さえつけ、調子に乗るなど言い付ける。同じ立場の妻である李瓶児だけでなく、お時めきであれば誰でもあつてもいじめる潘金蓮の姿勢は終始徹底している。その徹底ぶりは、潘金蓮の嫉妬深い性格によるものだろうが、加えて、彼女の生い立ちにも理由があると考えられる。

張大戸はかねがねものにしたいと思つていたが、女主人たる妻の気性をおそれて手出しできなかった。ある日、女主人が近所に招かれて家をあけたすきに、大戸はひそかに金蓮を部屋に呼び、ついに我が物とした。

田中『新訳 金瓶梅上』 第一回 三〇頁

潘金蓮がかつて他の家の主人に仕えていた時、その家のお時めきであつたのである。武大に嫁いだ後も、潘金蓮は夫婦共々、主人の屋敷に住んでいた。張家でお時めきとしての権力を発揮せんと、潘金蓮は主人と関係を持ち続けたのである。

また、潘金蓮は自身の母親に転売され、仕える屋敷を一度変えている「第一回」。不安定な自身の立場に、過去潘金蓮も苦しめられただろう。このような経緯があるからこそ、『金瓶梅』の潘金蓮は、夫からの愛を渴望し、お時めきとなつた者を敵視するのである。

さらに、潘金蓮は如意が下手に出て、は私たち（お手付き）はそんな風（妻、夫人たち）になれないと恐縮するを聞き、激怒する。なぜなら、潘金蓮こそが、過去お時めきであり、そんな風になろうとした一人だからである。潘金蓮は如意の言葉によつて、過去お時めきとなり出世しようとした自身を否定された。だから怒り狂つたのである。このような過去を持つ潘金蓮はどれほどお時めきが脅威になるかを知っている。なので、潘金蓮はお時めきがどれほど恐ろしく、影響力があるのかを理解し、排除せんと動くのである。

潘金蓮と同様に、自身を時の運に見放された女だと話す者に、第四夫人孫雪娥がいる。夫人たちの中で侍女として仕えた経験があるのは、彼女と潘金蓮だけである。そんな彼女たちだからこそ、自身の立場を時の運だと称するのだろう。潘金蓮と孫雪娥は、それぞれお時めきの未来を示唆しているのである。

第三章 西門家での生活

一 『金瓶梅』における西門家の間取り

『金瓶梅』において、間取りは非常に重要である。なぜなら、西門慶の六人の妻たちは、生活の大半を部屋で過ごすからである。生活の大半を部屋で過ごすということは、間取りによって人間関係、生活そのものが変わってしまうということである。そのため、本章では『金瓶梅』の間取りがどのような影響を及ぼしているのかを調査、考察を行う。

本論で取り上げる第五夫人潘金蓮、第六夫人李瓶児は、本邸から離れた、玩花楼に部屋を持っている。彼女たち二人は、第三夫人孟玉楼が嫁いだ後、すでにある夫人のための屋敷の部屋が埋まった後に嫁いだ。そのため、玩花楼に部屋を持つこととなったのである。また潘金蓮と李瓶児の部屋は、本邸とは距離があるが、お互いに非常に近い場所に部屋を持っている事が特徴である。

さらに、西門家の間取りは、正面に対して左右対称に建物が作られている。これは、中国の伝統的な建築様式である。正面が重要な部屋であるため、正妻呉月娘の部屋が正面であるのも、利になっっている。その事を踏ま

えると、潘金蓮と李瓶児の建物は、異質であると言えるだろう。横並びに配置され、順番がつけられていないのである。また、本邸では収まらず、増設された建物にまで妾がいる事は、西門慶がどれほど色好みかを表しているのである。

この間取りの位置関係は、様々な効果を生み出している。作中、その特殊な位置はどのように描写されている。

西門慶は女を家に娶ると、花園内の樓の陛下を三部屋かたづけて、その住まいとした。ひとつづつと離れた小さな中庭に面しており、ぐるりをかこむ堀の通用門から入って行くと、中庭には草花の盆景が置かれている。昼間は人もめつたに訪れない、たいへんひっそりとした場所だった。

田中『新訳 金瓶梅上』第九回 一七八頁

これは、西門慶が潘金蓮を娶った後に、玩花楼に部屋を用意した場面である、玩花楼は人通りの少ない、静かな場所であることが分かる。潘金蓮は西門家で、孟玉楼の小者琴童や、西門慶の娘婿陳經濟と関係を持つ。その事が、中々露見しなかったのも、玩花楼と本邸の距離が

影響しているだろう。

玩花楼は、正妻呉月娘の眼が届きにくいという事と同様に、情報の伝達が遅れるという事がある。

「ひとつあなたに教えたいようと思つて来たんだけど、もう知ってるかしら」

金蓮、

「こんな隅っこ住まいじゃ、知るわけないでしょ」

田中『新訳 金瓶梅上』第二十一回 四三三頁

これは、潘金蓮によって仲違いしていた西門慶と呉月娘が、仲直りしたことを孟玉楼が知らせに来る話す場面である。

本邸に住む孟玉楼は、西門慶が呉月娘の部屋で休んだことを知っているが、離れたところに暮らす潘金蓮は知らずにいた事が強調されている。

以上の事から、潘金蓮と李瓶児の住む玩花楼は、人通りの少ない情報伝達も遅い、閉鎖的空間である事が分かる。この事は潘金蓮と李瓶児が、お互いを強く意識する効果を生み出している。作中、潘金蓮は李瓶児に嫌がらせを行っている。そして、その嫌がらせは激化し、李瓶

児の息子官哥や李瓶児は命を落としてしまう。次節では、間取りによって生まれる二人の対立を調査、考察する。

二 作者笑笑生によって仕組まれる潘金蓮と李瓶児の衝突

潘金蓮と李瓶児の部屋の構図は、作者笑笑生によって仕組まれたものである。なぜなら、本来潘金蓮は孟玉楼の部屋に住むはずだったからである。

潘金蓮が夫武大を毒殺し、後は輿入れのみとなった後、突然孟玉楼との縁談話が西門慶に舞い込む。そして、西門慶は潘金蓮より先に、孟玉楼を娶る事となったのである。その結果、本来潘金蓮が住むはずの部屋は、先に輿入れした孟玉楼の部屋となった。

その結果、潘金蓮と李瓶児は、本邸から離れた閉鎖的空間である玩花楼に暮らすことになる。やがて、潘金蓮は李瓶児へ嫉妬と憎悪を募らせ、殺すに至ったのである。なぜ潘金蓮が李瓶児をここまで憎むようになったのか。ここにも間取りが関わってくる。

西門慶は李瓶児が官哥を出産してから、李瓶児の部屋にばかり通うようになる。

この日、西門慶は部屋に入ると、まるまるとした我

が子がいそう色白に生まれついていたので、胸のよろこびはたいそうなもので、家の誰もがうかれたのしんだ。夜になると西門慶は李瓶児の寝室で休み、しきりと子どもの様子を覗きにくるのだった。

田中『新訳 金瓶梅上』第三十回 六三八頁

他の回でも、西門慶が李瓶児の部屋に、何度も通っているというのは示されている。その事について潘金蓮はいつも不平を抱いていた。

さて潘金蓮は、李瓶児が子どもを生んでからというものの、西門慶がいつもその部屋で休むので、たえず嫉妬の心を抱き、つねに不平の意を蓄えていた。

田中『新訳 金瓶梅上』第三十二回 六八五頁

潘金蓮からしてみれば、自分のとなりの部屋に住む李瓶児が、男児を産んだ上に西門慶が部屋に通いきりであれば、心中穏やかではないだろう。潘金蓮は李瓶児よりも先に西門家に嫁いだにも関わらず、男児どころか子供を産めていない。さらに、その心中を逆撫でするような出来事が起こる。

玉楼はたずねて、

「父様はどちら」

春梅、

「父様は六娘のお部屋に行かれました。」

金蓮はこれを聞いて、心に炎が燃え立つかのよう。

田中『新訳 金瓶梅上』第三十一回 六五七頁

金蓮、

「父様はきっと役者からおもどりではないんだね。」

平安、

「おもどりでないですって。城門の外であいさつを済ませられると、昼過ぎにはもどられ、六娘のお部屋で旨酒をお飲みですよ。」

田中『新訳 金瓶梅中』第三十四回 二九頁

「恥知らずのぶつは、あの人の部屋へ出入りしたかい」

春梅、

「六娘がもどられると、父様はお部屋にそれから二度行かれました」

田中『新訳 金瓶梅中』第三十五回 六七頁

この場面での恥知らずのぶつ＝「西門慶」 この場面でのあの人＝「李瓶児」

「表へ行ってもういちど見てきておくれ、父様がおかえりになったかどうか、さっさと知らせにもどるんだよ」

春梅は出ていき、しばらくしてからもどつてくると言った。

「奥様、父様もどられてないと、まだお思いなんですか。父様ならとつくのとうに帰られて、六娘のお部屋で飲まれてるじゃないですか」

女は聞かなければそれきりだったものを、聞いてしまったがために、心に刃が何本も突き刺さったかのよう。

田中『新訳 金瓶梅中』第三十八回 一二二頁

これらは、いずれも潘金蓮が李瓶児の部屋で西門慶が休んでいる事を知る場面である。潘金蓮が他の夫人の部屋で昨夜、西門慶が休んだ事を知る描写は複数あるものの、それを侍女や小者から知らされるというパターンは、李瓶児に関するものだけである。夫が来ない寂しさ

に、夫が自分以外の妻を選んだ悔しさ。それを侍女や小者に知らされるというのは、プライドの高い潘金蓮からすれば、非常に屈辱的な事だろう。

間取りの影響から、潘金蓮は本邸に住む夫人たちの様子や、特に西門慶が誰の部屋で休んだのかを即座に知る方法がない。しかし、隣に住む李瓶児であれば、西門慶が部屋で休んだとすぐ知る事になるのである。

潘金蓮は西門慶が訪れない寂しさから琵琶を弾きならす。寂しい部屋に琵琶が響く一方、隣の部屋では西門慶が李瓶児の部屋で仲良く酒を飲んでいる。第五夫人潘金蓮、第六夫人李瓶児、近い期間に嫁いだ二人であったが、男児の出産によって、大きく明暗を分ける事になったのである。

西門慶はちょうど部屋で李瓶児と酒を飲んでいたが、近くの部屋で琵琶を弾く音がふと聞こえたので、たずねた。

「琵琶を弾いてるのは誰だ」

迎春が答えた。

「五娘かあちらで琵琶を弾かれてる音です。」

田中『新訳 金瓶梅中』第三十八回 一二四頁

琵琶を弾く音が聞こえるほど、近い位置に部屋がある事が分かる。

このように潘金蓮は李瓶児へ嫉妬と憎悪を募らせていった。そんな彼女がどうやって李瓶児を排除したのか。次節ではそれを調査、考察していく。

三 激化する潘金蓮の李瓶児への嫌がらせ

潘金蓮は、李瓶児に対し、様々な嫌がらせを行う。嫌みや小言はもちろん、他にも「第二十回、第五十回」に正妻呉月娘に対し、李瓶児の讒言を行う。「第三十一回、第四十一回、第四十三回」、西門慶に李瓶児を陥れるような事、李瓶児に関する嫌みを言い西門慶を激怒させる。数多くの嫌がらせに対して、いつも李瓶児は耐え、西門慶に何かあったのか聞かれても、答えなかった。すぐに房で西門慶に言い付ける潘金蓮とは対照的である。

さらに潘金蓮は、李瓶児の子供官哥にも、同様に嫌がらせを行う。乳母から奪い取り驚かせる「第四十八回」、夫人の中で自分が字が読める事を利用し、嘘の暦を言い官哥の頭を剃らせる「第五十二回」。犬猫が苦手な官哥を放置し、陳經濟と戯れる。結果、大きな黒猫に驚かされた官哥の体調が悪化する「第五十二回」。

このように、潘金蓮の行う嫌がらせは多岐にわたり、執拗である。その中に、潘金蓮が間取りを利用し行った嫌がらせがある。

「この奴隷の淫婦め、お前いつからそんなにえらくなった。他の人がお前をちやほやしたって、私はそうは行かないよ。姉さん、お前さんもわかってるだろう。ほどほどに合わせてくれなきゃね。やたらと頭をもたげて、何を威張ってるんだい。姉さん、いい気になっちゃだめさ。こんどからは両の目玉をこすって、あんたを見てるからね」

罵りながら打ち、打つと痛罵する。秋菊はたまらず豚が殺されるかのように叫んだ。李瓶児はあちらで起きたばかりで、ちょうど乳母が官哥に乳をやり寝かしつけるのを見ていたが、子どもはびっくりして目を覚ましてしまった。金蓮がこちらで女中を打ち、挑むような物言いでもっているのは明々白々と耳に入ったが、聞いてもひとつも発することはなく、うろたえて官哥の耳を塞ぐばかり。

田中『新訳 金瓶梅中』 第四十一回 一九〇頁

この場面は、潘金蓮が李瓶児に聞こえるように声を張り上げて、庭で秋菊を打つ場面である。この前日、官哥は親族の年近い女の子と婚約した。その際、李瓶児は正妻呉月娘と同じく祝いの赤を見にまもっていた。正妻と同じ洋服を身につける事は、李瓶児が正妻に近い位置まで出世した事を意味している。潘金蓮は激怒し、西門慶が役所に仕事をしに家からいなくなると、怒りを爆発させる。

李瓶児の部屋で休む西門慶に知られないようにその日は待ち、次の日秋菊を罵り打つ。李瓶児がやめるよう伝えても、鞭を振るい続けたのである。これは実際には秋菊を打ちながらも、言葉では李瓶児を罵る事で、李瓶児に間接的に鞭打っているのである。

その後も潘金蓮は、李瓶児に対し、嫌がらせとして秋菊を打つ。西門慶は自身の誕生日の夜第五十八回、李瓶児の部屋で休んだ。翌日の早朝には、体調の悪い官哥のため往診医を招いた。潘金蓮はそんな甲斐甲斐しい西門慶に腹立たしさを覚えながらも、官哥の体調が悪い事を即座に察し、またもや嫌がらせとして今度は庭にいる犬を打つ。さらに、それだけでは済まさず秋菊の粗探しをする、再び秋菊を罵り、打つのである。迎春が犬を打

つのを止めるように言っても、次に繡春が秋菊を打つのを止めるように言っても、潘金蓮は決して止めなかった。しまいは、泊まりに来ていた実の母親が止めるように言っても、潘金蓮は、むしろ母親を罵り激しく秋菊を打ち続けたのである。さらに、間の悪い事にその日、西門慶は本邸の孟玉楼の部屋で休んでいた。次の日は誕生日祝いとして招待され家を空けていた。そのため、西門慶はこの惨事を知る事がなかったのである。

当然、潘金蓮は西門慶が家を空けると知ってたに違いない。だからこそ、巧妙に間接的に李瓶児と官哥を打っているのである。

官哥は気が弱く、些細な事で驚き引き付けを起こす。李瓶児もまた優しい性格で、罰を受ける秋菊を許すよう潘金蓮に頼んだり、人を打つ罰には嫌悪感を見せる。

西門慶、

「他のことはまあよしとして、あの子は少々臆病でして。家では女中三、四人に乳母まで加わってかわるがわる見ているんですが、怯えっぱなしで、猫や犬だつてあの子の前に連れちゃいけません」

この場面でのあの子Ⅱ「官哥」

「琴童にこの奴隷を答で二十、しつかりと打たせておくれ」

琴童がやっと十まで打ったところで、さいわい李瓶児がにこにこしながらやってきてなだめたので、このりの十回は許してやった。

田中『新訳 金瓶梅上』第三十回 六二五頁

李瓶児、

「このうえ打ってどうしようというの。齒を剥き出しにして痛がる様子なんて、見られたものじゃないでしょう」

田中『新訳 金瓶梅中』第三十四回 二六頁

そんな親子二人には、潘金蓮が犬や秋菊を手酷く打ち、悲鳴が上がるのは耐え難い事であろう。とうとう官哥が死んでしまうと第六十回、李瓶児が子供を亡くし、元氣一杯の潘金蓮の嫌がらせは更に激化する。しかし、もはや李瓶児は侍女をよこし潘金蓮を止めなくなった。あまりの苦しみから茫然自失となり、自身が見殺しにし

た元夫花子虚と愛しい我が子官哥の夢を見るようになる。

官哥は潘金蓮の飼い猫、雪獅子に襲われ引き付けを起こし死んでしまう。潘金蓮は官哥を亡き者にせんがため、赤い布でくるんだ肉を雪獅子に飛びかからせ食わせていた。官哥の産着はいつも、緋色であった。潘金蓮と李瓶児の部屋が近くなければ、潘金蓮の策略は成功しなかったであろう。

これら潘金蓮の嫌がらせは、玩花楼内の出来事はお互いに届くが、本邸には届かないその性質を利用したものである。以上のことから、潘金蓮と李瓶児間の確執が強まる始まりから、ついに潘金蓮が李瓶児と官哥を殺すに至る終わりまで、細やかに西門家の間取りが関わっている事が分かった。

おわりに

本論では、西門家を中心に『金瓶梅』の潘金蓮を中心とした女性（夫人たち）の世界を鍵に研究、理解を深めていった。各章を通して、『金瓶梅』の緻密な構成を指摘し、『金瓶梅』世界の女性たちを考察した。『金瓶梅』

という作品から、女性たちは、家から出られない事を当然とし、それが常識であった事が伺える。

私は女で、表門のあたりにだって行くことがないんですよ。歩かれども飛べぬ身に、何がわかりますか、

田中『新訳 金瓶梅上』 第十四回 二八五頁

この言葉に、現代に生きる人々は驚くだろう。女性たちは行事などがない限り、家からは出られないのだ。

『金瓶梅』では、三従四徳や、夫が妻たちの部屋に通う結婚形態など、現代にはない価値観が存在する。

『金瓶梅』という作品や登場人物を理解するに当たっては、その価値観を学び理解する事が必要不可欠である。『金瓶梅』に真摯に向き合うには、私たち読者も自身の価値観で物語を見るのでは不十分である。

価値観を学び、理解してこそ、潘金蓮が悪女として開花した理由を察し、李瓶児が夫西門慶に何も言わなかった事に寄り添い、龐春梅の出世に驚く事が出来るのである。

付録 西門慶が潘金蓮と李瓶児の部屋へと訪れる場面から見る関係性の変化

第九回	潘金蓮	新婚
第十回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶が龐春梅をお手付きにする事を手引きする。(意図的に部屋を空ける)
第十一回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶に甘え孫雪娥を陥れる。
第十三回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶と李瓶児が男女の関係にあることを知る。 二人の逢い引きを手引きする。
第十六回	潘金蓮	西門慶と潘金蓮、李瓶児と行った行為の再演。
第十八回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶と妓女の仲を引き裂く。
第十九回	潘金蓮 (孟玉楼) 李瓶児	西門慶、李瓶児が嫁入りしてきたが(第六夫人となる)、蔣竹山の件で怒り、潘金蓮の部屋で休む。 西門慶、未だ怒り収まらず。新婚にも関わらず三日他の女性の部屋で休む。 李瓶児、首吊り自殺未遂。その後漸く西門慶訪れる。
第二十回	李瓶児	新婚の次の朝、李瓶児は他の夫人に気遣いを見せるなど、婦道に沿った行動。 潘金蓮、歌を使い、呉月娘と李瓶児の仲を引き裂く。

第二十一回	(呉月娘)	西門慶、呉月娘が日夜西門家のために祈っていることを知る。 それを知り潘金蓮、歌を使い嫌みを言う。 西門慶と一晚過ごした呉月娘。自ら皆に茶を振る舞う。 その夜、再び西門慶は呉月娘のいる母屋で過ごす。 孟玉楼の誕生日。二人の床入れを皆で見送る。この事から、 <u>誕生日などはその夫人の部屋で過ごすことがマナーである事がわかる。</u>
第二十八回	潘金蓮	潘金蓮、亡くなった宋恵蓮の靴を切り刻もうとするなど、嫉妬深い。
第二十九回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶に讒言を行い呉月娘を怒らせる。 潘金蓮、西門慶が李瓶児の色白褒めるを聞き、白粉を体に塗る。
第三十回	潘金蓮 李瓶児	李瓶児、西門家待望の男児出産。 西門慶、官哥が産まれてから、夜は李瓶児の部屋で過ごすように。
第三十一回	李瓶児	西門慶が潘金蓮の部屋の方に向かったが李瓶児の部屋へ行くためであった。
第三十二回	李瓶児	潘金蓮、西門慶が、官哥が産まれてからずっと李瓶児の部屋で休むことに嫉妬。官哥をいじめる。
第三十三回	李瓶児 潘金蓮	西門慶、一度李瓶児の部屋へ訪れるも、李瓶児に潘金蓮の部屋で休むよう言われる。
第三十四回	李瓶児	西門慶、李瓶児が官哥の服を縫う様子を見守る。※父様はとなりの六娘のお部屋じゃないか。 西門慶昼、夜と重ねて李瓶児の部屋で過ごす。潘金蓮はまたもやそれを知る。

第三十五回	李瓶児	潘金蓮、またも西門慶が李瓶児の部屋にいることを知る。
第三十七回		李瓶児、妓女に夢中で屋敷に帰らない西門慶を呼ぶ。以前は、呉月娘が呼んでいた。(それほど李瓶児の部屋で休んでいる)
第三十八回	李瓶児	西門慶、まっすぐ李瓶児の部屋へ。 隣の部屋の潘金蓮、寂しさから琵琶をつま弾く。西門慶が李瓶児の部屋で休んでいることを知る。
第三十九回	潘金蓮	李瓶児、潘金蓮の嫉妬に気付き西門慶を潘金蓮の部屋で休ませる。
第四十一回	李瓶児	潘金蓮の誕生日。しかし西門慶は官哥の用事を優先し訪れない。
第四十三回	李瓶児	潘金蓮、西門慶がいない内に、李瓶児へ嫌がらせを行う。
第四十四回	李瓶児 潘金蓮	西門慶、その晚訪れるも李瓶児話さず耐える。
第五十回	李瓶児 (李嬌児)	潘金蓮、西門慶を部屋で休ませようとするも西門慶まっすぐ李瓶児の部屋へ。
第五十一回	潘金蓮	西門慶、李瓶児と休もうとするも、客人がいるため断念。 西門慶、一度は李嬌児の部屋へ行くも、再び李瓶児の部屋へ。 ※潘金蓮、西門慶が李瓶児の部屋で楽しんでいることに嫉妬。 李瓶児、西門慶に涙のわけを聞かれるも、言わずに耐える。 西門慶、胡僧の薬を潘金蓮と試す。潘金蓮、また来るように約束を交わす。 その晩再び西門慶訪れる。

第五十三回	潘金蓮	西門慶、官哥を驚かせないよう潘金蓮の部屋で休む。
第五十四回	李瓶児	官哥に続き、李瓶児も病気に。 西門慶、医者呼び自身も甲斐甲斐しく世話をする。
第五十八回	李瓶児 (孫雪娥)	西門慶、酷く酔っ払い、孫雪娥の部屋へ。一年あまりぶりのこと。 西門慶の誕生日。李瓶児の部屋へ。潘金蓮、嫌がらせに犬を叩き秋菊を打つ。
第五十九回	李瓶児	官哥、とうとう死んでしまう。一年と二ヶ月の命だった。 西門慶尋常ではない様子の李瓶児に付き添い三晩続けて休む。 西門慶、官哥の葬儀を肅々と行い、夜は、李瓶児の部屋で添い寝し、様々な言葉をかけ慰める。
第六十一回	李瓶児 潘金蓮	西門慶、李瓶児の部屋で休もうとするも、李瓶児に断られる。 西門慶、李瓶児に勧められ潘金蓮の部屋で休む。 李瓶児、体がますます悪くなり、倒れ昏睡する。 西門慶、李瓶児を見まい、向かいの寝台で眠る。
第六十二回	李瓶児 李瓶児 潘金蓮	李瓶児、とうとう寝たきりになってしまい、西門慶泣きながら部屋で付き添い過ごす。 西門慶、李瓶児の部屋で寝ようとすると、断られ、潘金蓮の部屋へ。 西門慶、李瓶児のため三百五十両の棺桶板を用意する。良い板を用意するため、験担ぎの意味もあるため早めに用意した。 道士が西門慶に李瓶児の部屋に行かないようにと話す。 西門慶、自分が死んだって構わないと李瓶児の部屋へ。 李瓶児、死んでしまふ。

第六十三回	(李瓶児の部屋)	李瓶児の葬儀。西門慶、遺影を書かせる。 西門慶、夜になると李瓶児の位牌の脇で一人で休む。
第六十四回	(李瓶児の部屋)	西門慶、夜は李瓶児の霊前で休む。
第六十五回	(李瓶児の部屋)	李瓶児死後三十五日。西門慶はこの日まで一人寝をしていた。
第六十七回	(李瓶児の部屋)	西門慶、牛乳菓子を見て李瓶児を想う。 西門慶、夢に李瓶児現れる。二人で泣きあう。
第六十八回	潘金蓮	李瓶児のため衣裳櫃を焼き潘金蓮の部屋で休む。
第七十一回	何家 (「李瓶児」)	西門慶、出先で休む。夢に李瓶児現れる。
第七十二回	潘金蓮	潘金蓮、西門慶の心を引き留めるがため、大胆な行動に出る。 潘金蓮、西門慶に薬を隠せる帯を作る。約束を取り付ける。
第七十三回	潘金蓮	潘金蓮、子作り薬を得る。 孟玉楼の誕生日、西門慶が李瓶児を想い泣く。 ※潘金蓮、西門慶が『去りにし人』を歌わせたことに腹を立てる。 潘金蓮、西門慶に帯を渡す。
第七十四回	潘金蓮 (李瓶児の部屋)	西門慶が李瓶児が死んでから、潘金蓮の部屋にばかりいることが分かる。 西門慶、李瓶児の部屋へ行こうとするも、潘金蓮の部屋へ。呉月娘、孟玉楼が誕生日のためこの事を怒る。

第七十五回	潘金蓮 (孟玉樓) (呉月娘)	潘金蓮、呉月娘の前で西門慶を部屋に呼ぶ。 ※この事は著しいマナー違反。夫を部屋に呼ぶなどが許されれば、皆で夫を取り合うことになるからである。その上、潘金蓮は正妻の前でこれを行ったため、とんでもないことである。 呉月娘は怒り心頭。西門慶をようやく、孟玉樓の部屋へと送る。 そのため、潘金蓮は子作り薬を飲んでいたが失敗した。正妻呉月娘と潘金蓮、決定的に対立する。西門慶、呉月娘を看病する。
第七十六回	潘金蓮 (李嬌兒) (孫雪娥)	西門慶、潘金蓮の部屋へと行こうとするも呉月娘に止められ李嬌兒の部屋へ。 潘金蓮、西門慶に呉月娘との事を泣きつく。 西門慶、呉月娘と潘金蓮が揉めているためか、孫雪娥の部屋。
第七十九回	潘金蓮	西門慶、具合が悪い中潘金蓮の部屋へと運ばれる。潘金蓮、淫心を抑えきれず「西門慶」に薬を過剰摂取させる。 西門慶、言付けを残し、皆に見守られながら、死んでしまう。

【参考、引用文献参考、引用文献】

藤原美樹・松本静夫『中国古典文学にみられる住まいの空間的秩序に関する研究『金瓶梅』の結婚儀礼を中心として』

(日本建築学会『日本建築学会計画系論文集』二〇〇五年七十卷五八七号)

田中智行『新訳 金瓶梅上』(鳥影社、二〇一八)『新訳 金瓶梅中』(鳥影社、二〇二一)

小野忍・千田九一訳『金瓶梅』(岩波書店、一九七三・一九七四)